時流を読む

ふるさとを語り継ぐ

農的社会デザイン研究所 代表 蔦谷 栄一

南相馬から届いた聞き書き選書

南相馬市原町区に、篠笛の会での出会いをきっかけに懇意にしていただいているKさんご夫妻がいる。その奥様の同じ原町区に住むお姉さんが、南相馬市でも南、もっとフクイチに近いところの小高区大富地区で活動を展開しておられ、そこでの活動記録『語り継ぐ、ふるさと南相馬～動きだす人々、大富の暮らし～』をお送りくださった。表紙には「まなびあい南相馬　聞き書き選書3」とある。

あとがきを見ると、この小高区大富は2016年7月12日に避難指示解除となり、「その年の暮れから、戻ってきた人々のための憩いの場として毎月隔週の土曜日にサロンが開催され」るようになり、そのサロンでの活動のいっかんとして聞き書きが行われたようだ。

この聞き書きは復興庁の「心の復興事業」として2016年に開始されたもので、「高齢者が地域の誇りとつながりを取り戻し、暮らしを再構築しようという意識の掘り起こし」につながることを期して行われたとある。今回が3冊目となり、選書1は、「八十代の皆さんの子どものころの体験をお聞きしたところ、はからずも、それぞれの戦争体験が浮かび上がったものとなった。選書2は、「江戸時代に遡った地域の成り立ちを聞くことができ、『地域とは？コミュニティとは？』という問いかけが解明されていく体験」をもたらすものとなった。

焼き餅復活の記録

今回お送りいただいた選書3は、「食」をテーマに地域の掘り起こしを試みたものである。第1章は「ニュースレター『食』のキロク」、第2章が「農家の暮らし、畑の歳時記」、そして第3章が「対談　地元学から大富の未来を探る」で構成され、特に第1章、第2章に目をひかれた。第1章は当地の名物とされる「焼き餅」の復活への取組記録で、本来の陸稲の米粉を使っての焼き餅とするために、種籾を確保し、取り止めて久しい陸稲栽培から挑んだもの。これをニュースレター仕立てにして、1年間にわたって毎月フィードバックしてきたものを束ねたもので、デザインも優れ、写真が豊富に入った見ごたえのある記録となっている。

第2章は、とれた野菜を食べつくす「お母ちゃんたちの農的暮らし」が持つ知恵が満載されている。キュウリの佃煮、花オクラの酢漬け、干し野菜等々、調理をしながらのお母ちゃんたちの話は、野菜の話から、家事の話、農作業の話、さらには地域の話にまで広がり、読んで楽しいだけでなく、教えられることは多い。

広がる聞き書き活動

このところ各地で聞き書きを作る活動の話を耳にすることが増えた。昔は囲炉裏を囲んで老人から孫にいろいろの話が伝えられたが、時代は大きく変化してしまった。こうした聞き書きの活動をとおして、ふるさとを見つめ直し、記録として語り継いでいくことはますます大事になってきているように感じる。